

風塵往来 6

『武満徹全集』が出た（小学館刊）。いや正確に言えば二〇〇一年に刊行されたものが没後一〇年を記念して、再びギャンペーンが張られていました。折しも『芸術新潮』二〇〇六年五月号も武満の特集を組んだ。全集は全五巻、CD五八枚に及ぶ。勢い、かなり高額である。

初期の佳作「弦楽のためのレクイエム」が書かれた一九五〇年代には、武満はまだほとんど無名。当時のスターは團伊玖磨、芥川也寸志、黛敏郎の三人男。ニューヨーク・フィル百五周年の委嘱作も黛に舞いこむはずだった。バーンスタインの助手を勤めていた小沢征爾の推挙で、武満に白羽の矢が立った。代表作「ノヴェンバー・ステップス」（一九六七年）の誕生舞台裏である。後でバーンスタインは小沢に言つたという、「君の選択は正しかつたね」。

話は變るが、樂吉左衛門氏は氣分転換のため、京都郊外の別荘で現代音楽のCDをボリュームいっぱいに掛けるらしい。曲は新ワイン樂派の旗手、アルバン・ペルクの「弦楽四重奏曲・作品3」。私も好きでよく聞く。樂さんもそうであろうが、私が現代音楽、それもとくに室内楽を好んで聴くのは、楽しみや慰めのためではない。脳細胞にフレッシュ・エアを吹きうけるためである。思索の糸がもつれにもつれた時それらを聞くと、解決に至らないまでも脳細胞の隅々までが立ち上がり精神がしゃんとしてくるのを期待してのことなのである。私の恣意的な分類では現代音楽に二種あり、一つは割り切れる合成數的で有機的な音楽、他の一つはどこまでも割り切れない素数的で無機的な音楽。私には前者はバルトーケ、プロコイエフ、シーンベルク、ペルク、ウエーベルン、アルヴィオ・ペルト、ヴェリヨ・トルミスなど。後者はメシャン、ヴァレーズ、クセナキス、リゲティ、ブーレーズ、シュトックハウゼン、武満など。武満を後者に入れるのは抵抗のある向きもあるかも知れない。しかし私は武満は、時としてつらいのである。尖鋭的であるとは、常に七首を懷に忍ばせているようなものなのだろうか。武満の盟友・大岡信氏も言つて、「ぼくにはいつも手裏剣の名手と、彼は映っていた」。

独断と偏見を怖れず言えば、現代音楽の室内楽曲として私にとって至高のものの一つは、バルトーケの六曲の「弦楽四重奏曲」である。樂さんの別荘の吹き抜け天井の広い居間で、ボリュームをいっぱいに上げてペルクとバルトーケとを聞き比べてみたいと思う。

（館長 伊藤郁太郎）

展示室から

企画展 牡丹—花咲く東洋のやきもの

5月6日の講演会では、泉谷豊宣先生の講演に先立って、小原雅子・小原流家元代行のごあいさつをいただきました。小原家と安宅家とは4世代にわたって交流があるとのことで、今回の講演会もその縁で実現したものです。ごあいさつでは、3代家元・小原豊雲氏が「安宅コレクションにいけ」という展覧会を2回も行われたこと、その折に作品に直接水を入れることができず、たいへんご苦労をされたことなど、館員も知らないエピソードをご紹介いただきました。

講演会終了後には、展示ロビーで泉谷先生に直接花をいけていただくということになり、居合わせたお客様は、たいへん感激されたご様子でした。この作品は翌週まで展示されていましたので、ご覧になられた会員のかたもいらっしゃるかと思います。やきものの花文様だけではなく、実物も加わって、まさに館内は花盛りとなった週末でした。



能サウンド・ミュージアムオブアート 美術と能の響き

能の響きを美術館で聞いていただこうという企画「能サウンド・ミュージアムオブアート」の第3回公演を東洋陶磁美術館で開催することになりました。これは、日頃は大倉流小鼓方として能の囃子方を勤める久田舜一郎（重要無形文化財総合指定保持者）がすすめているものです。限られた人だけが享受している印象がある能ですが、もっと広く多くの方々に楽しんでいただけるよう、能楽堂以外でのコンサートもおこなっています。美しいものたちが醸し出す独特の空間で、音の世界から能に出会っていただこうという試みです。

能の音楽は、その響きも楽器も、遠く大陸から伝わり日本で独自の発展を遂げたといわれています。東洋陶磁美術館の作品は能とルーツを同じくする風土で生まれたものです。悠久の陶磁器たちと時間芸術である音楽との素晴らしいコラボレーションが実現できるものと思います。

能の音楽は笛（能管）と三つの打楽器（小鼓、大鼓、太鼓）そして歌（謡）からなりますが、今回は笛と小鼓でその世界を楽しんでいただきます。「音取」「下り端」「樂」「早舞」といった曲の演奏とそれに関するお話をします。（大倉流小鼓 重要無形文化財総合指定保持者 久田舜一郎）

※詳しくは別紙ご案内をご参照ください。

展示替休館:7月24日(月)~8月1日(火)
次回展示:平成18年8月2日(水)~平成19年1月28日(日)
テーマ展「梅瓶—高麗と日本のかけ橋—」
特集展 受贈記念「人間国宝 清水卯一の陶芸」
常設展「東洋陶磁の展開」

所から作品を見ましたが、どうしていいことができるのかとても不思議でした。泉谷先生曰く「できて一人前」恐れ入りました。(S.S.)

しかも今、自分が人に説明することになろうとは夢にも思っていませんでした。(C.O.)

大阪市立東洋陶磁美術館

友の会通信 通巻第78号

2006年7月1日発行 No.22-2(年4回)

編集・発行:大阪市立東洋陶磁美術館友の会事務局
〒530-0005 大阪市 北区中之島1-1-26
TEL.06-6223-0055
<http://www.moco.or.jp>
デザイン:清嶋滋+studioTWEN 印刷:岡村印刷工業株式会社



牡丹 野村楓 緹蒲
白磁錦壺 朝鮮時代・18世紀
大阪市立東洋陶磁美術館蔵

編集後記

牡丹展を記念して行つたいけばなのデモンストレーションは、普段「いけばな」とは縁のない私にとって、驚いたことが多くありました。その一番は「盛花」を挿すのに、正面からではなく、後ろから挿していくことでした。しかも、確実にいい場所にピッちもっていくところが凄い。正面に鏡を置いてあるのかと思えるほどでした。終了後に先生がいたた

て私にとって至高のものの一つは、バルトーケの六曲の「弦楽四重奏曲」である。樂さんの別荘の吹き抜け天井の広い居間で、ボリュームをいっぱいに上げてペルクとバルトーケとを聞き比べてみたいと思う。

独断と偏見を怖れず言えば、現代音楽の室内楽曲として

私は、普段「いけばな」とは縁のない私にとって、驚いたことがあります。その一番は「盛花」を挿すのに、正面からではなく、後ろから挿していくことでした。しかも、確実にいい場所にピッちもっていくところが凄い。正面に鏡を置いてあるのかと思えるほどでした。終了後に先生がいたた

本日の資料として色々な本から抜粋した「いけばなどしての牡丹」という小冊子を作りましたので、これに従ってお話していきたいと思います。

牡丹の栽培は中国の唐時代から始まり、それが日本に輸入されたのは奈良時代かと思います。その頃は、牡丹をホウタンと呼んでいました。『枕草子』の中に「ホウタンの唐めきおかしきこと」つまり中国風で面白いと記載され、室町末期の『仙伝抄』という花伝書には「卯月はほたん」とあり、ここではウが無くなつてホタンになっております。これが江戸の初期になると『口説抄』で「ボタンは漢土にて花王と称す」と記されています。花王とは百花の王としての意味をもち、中国では牡丹をこの名称で呼んでいました。『本草和名』では「ふかみ草」、「廿日草」とあります。「廿日草」というのは、牡丹が蕾から開花して散るまで20日間もつことからこの名称が生まれ、江戸初期には牡丹の種類も非常に多く栽培されていたことがわかっています。

『口説抄』には「花数は多く使うべからず」花は数少ないほうが牡丹の美しさがあると書かれ、「芯に半開きを一つ、それから足もとに開花を一花もちふ」と2輪くらいのほうが牡丹の味わいが充分發揮できるとあります。花数が少ないほうが、牡丹のたたずまいがいかされるという考えは、明治に入るまでずっと続き、せいぜい3輪までが限度とされていました。その後の未生流の『挿花さくらの香』(Fig.1)でも、牡丹を「一色二入」れ「別の花あしらうこと禁ず」と一種のほうが牡丹の美しさがでるという解釈をしています。

宝塚の山本は花卉栽培の盛んな地域で、明治20年代には牡丹を薬用として栽培していました。栽培時に牡丹の根を生育させるため、5月頃に牡丹の花を首から落としていました。チューリップの球根を育てる時も花を首から落としますが、それと同様な考え方で牡丹の花は切られたのです。それを当流祖である小原雲心師が山本の知人宅に伺ったとき、この落とされた牡丹の花をいけてみないかといわれ、お皿に牡丹の花と葉を置き合わせました。どのようなお皿だったかわかりませんが、このような鉄鉢の器(Fig.2)にいれたのが盛花のそもそも始まりではないかと考えられます。明治20年代以前は挿入花と呼ぶものは非常に少なく、生花とか立花などが主流を占めていました。遠州流の茶花をみると、普通の茶花と違って「きれい寂び」と称し、大広間にいける場合に挿入花がありました。しかし挿入花はいけばなの様式の主流ではなく、あくまでも生花とか立花の底辺にある手懇みにいけたものが挿入花ではなかったかと思います。

〈デモンストレーション1〉(Fig.3)

こうした手付の籠を牡丹籠と呼び、大小色々あります。全部同じように開花した牡丹だけではなく、できるだけ開花したものと蕾を合わせたほうが良いでしょう。牡丹は葉をできるだけ大切にします。遠州の茶花にもでていますように、牡丹は花が立派であっても、葉の緑がなければきれいに見えないと思います。牡丹籠の蔓の中で挿したほうがいいのですから、大きな軽い枝でも、この中に置き合わせる状態にします。このように枯れ木と牡丹の花をあわせるのは、日本の能楽もありますが、中国の「石橋」に語られている唐獅子が牡丹に戯れている姿を表すためです。今日は大きな枯れ枝ですから、ここに梅花空木を少し挿し加えることによって、花の面白さが出てくるのではないかと思います。品格を出すのでしたら牡丹一式のほうが良いのですが、色彩的に面白く見せようと思うのならこうした使い方もあるわけです。籠は非常に華奢ですし、牡丹はあまりまっすぐに立てるとその姿がきれいに見えないものですから、少し強めに前傾させました。それだけに枯れ枝はバランスをとるために後ろに立て、全体の均衡をうまく保たせるように挿してみました。

〈デモンストレーション2〉(Fig.2)

牡丹は、牡(おす)の丹(あか)と書きます。そのため花の赤いものが牡丹でも最上級のものとされます。また牡丹は実を結びますが、新しい苗は根から生まれます。実からではなく根から苗をとるため、牡(おす)の丹(あか)と書いて牡丹と読むのです。明治20年代には盛物が流行りましたから、雲心師は置き合わせの面白さを考えたのではないかと思います。

背の高いところに、蕾の中開きをもってきます。そして硬い蕾をおいたので、最後の締めぐりに中開きのものを逆に少し方向を変えておいても良いと思います。先ほど申し上げたように牡丹は葉の美しさがあつて初めて花がいきます。組物には足もとに牡丹の葉の緑を出すと良く映えるのではないかと思います。こうしたものを当時は水盤挿入とか、皿盛りと称し、まだ盛花という言葉はなかったようです。それが一般にもてはやされ、家元自身ではなく、外部の人たちが盛花ということを言い始めて、現在の盛花という名称が作られました。こうした首の牡丹が盛花創案の一つの端緒になったのではないかと思いましたので、今回ご覧にいきました。

〈デモンストレーション3〉(表紙)

この牡丹は風変わりな黄色い花ですが、折角美術館所蔵の器にいきますので、黄色の牡丹も色彩の花としていけられるのではないかと思います。黄色い牡丹であるだけに、同系色の野村楓などは、調和が上手く取れるのではないかと思います。しかし、これだけでは季節感が薄いため、初夏らしい趣として、縞蒲という蒲でも縞があって涼やかできれいに見えるものを少し添えることで、面白さがでるかと思います。ただ主役は牡丹ですから、あくまでも牡丹の姿、色合いを崩さないほうが良いと思います。器に力があるので、重い感じよりもある程度軽やかで、そして季節のもつている移ろいが感じられるようにしました。

〈デモンストレーション4〉(Fig.4)

花器にも牡丹の図柄がありますが、非常に渋い趣のある器なので、牡丹の写りもいいのではないかと思います。まず松を、あまり留め木を使うことを避けて、もう一本は足もとに持つてゆき、どちらに返るかによって留めます。花というのは3点が器に接触すれば落着きます。ちなみにここでは口元と右後ろにこの枝の根元があります。そしてずっと下に留め木を置いたので、この花は回転しないようになっています。

牡丹は水あがりの良くないものですから、それだけにしっかりした水揚げをします。先ず牡丹を枝からはなすと、根が炭になるまで焼きますが、それだけ焼いても足もとを切りすぎると持たないです。そして今の時期なら黄梅をいれます。お正月頃は同じ黄梅でも迎春花と呼んでおめでたい時にも使い、夏黄梅はそれに類するのですが、ここでは蔓性を生かしてほんの少量いれることで、牡丹の彩りをよいそう美しく見せるようにしたいと思います。抛入はあまり数多く挿すよりも、少なくてそれぞれの美しさができるようにするのが良いと思います。牡丹の葉が数少ないときは、黄梅の葉の緑でそれを補っていくのもいいでしょう。いけばなはすべてアンバランスになっています。左右がシンメトリーになっているのは、面白さがありませんので、全体にみてアンバランスのほうが、花の持っている生気とか面白さ、力強さなどが生まれてくると思います。ここでは朱鷺色の牡丹に松と黄梅を添えて非常に渋いので、上の花が一層華やいで見えるのではないかと思います。

〈デモンストレーション5〉(Fig.5)

これは長方の水盤と呼んでいる高取のやきものです。よく「立てば芍薬、坐れば牡丹」といい、牡丹はできるだけ低くしたほうが面白さを發揮できますが、芍薬は草物ですので、できるだけ伸びやかにしたほうがいいのです。唐時代までは芍薬が主流をしめていました。当時、牡丹を「木芍薬」と称し、後からついた名前が「牡丹」なのです。芍薬は紀元前から薬用として使われていた歴史があります。江戸の初期から中期に、尾形光琳(1658-1716)を中心に、俵屋宗達(-1640頃)から酒井抱一(1761-1829)までの絵師達の流れを琳派といいますが、その琳派絵画を三世豊雲師が「琳派調いけばな」としていけばなに取り入れました。それまで横長の器に色彩的なものを大きく展開させることは非常に少なかったのです。ここでは対照的に濃い牡丹と淡い牡丹の二種類を使い分けました。小原流の盛花には様々な表現が可能ですので、色々な幅のある花が生まれることを、ここでデモンストレーションの一つとして、琳派絵画に範をとったものを行ってみたいと思います。

豊雲師は、こういう横長のものをいける場合には「絵巻のように」という言葉を良く使われました。左右に大きく展開して、始めもなければ、終わりもない余情の花という面白さを出したほうが、琳派を範とした作品としてふさわしいのです。ここでは主役は牡丹ですが、そこに桜をそえることによって優雅な感じが出るのではないかと思います。しかし桜の花色にあまり牡丹を近づけると相殺することがあります。そこでこの黄金楓の緑を効かした方がいいのではないかと思います。同じ楓でもこうした斑の入った楓もあります。これは鳴立つ沢楓で、この斑の入っている姿が優雅で面白いと思うのです。これも牡丹と同じように水揚がりが悪い材料ですから、割った切り口に鷹の爪を挟みこむ、できればアルコールですると長持ちするものなのです。今の時期の花は水揚げの悪いものが多いですから、水の手當をしっかりしてから挿したほうがいいでしょう。この花はピンクが華やかですから、あまり赤々とした花を多くするのは相応しくないので花数を少なくします。少しだけ赤を加えることで色の濃淡の変化が生まれ、また季節らしい趣も出てくるのではないかと思います。

資料に「木蓮と牡丹」(Fig.6)があります。これは「玉堂富貴」という文人画の画題がありますが、立派な邸宅の庭にある牡丹と解釈してもいいですし、立派な邸宅の身分の高いお金持ちという意味で、非常におめでたい感じもあると思います。木蓮は中国では「玉蘭」、「白玉蘭」といわれますので、木蓮と牡丹でも「玉堂富貴」を表しますし、それに海棠を入れる場合もあります。これは語呂合わせみたいなもので、玉蘭の「玉」と「堂」は海棠の棠、それに富貴の牡丹、そういう中国文人の考え方を反映していられたのが文人花と呼んでいるものです。小原流でも初代以来、品格や格調を表わしている花が非常に多く、これらは古典的な花ですので、現代花とは少し趣が違っています。そうした花も多いに鑑賞していただきたいと思います。その右側にありますのは(Fig.7)、寒牡丹とふきのとうと隈笹、そして敷き松葉をしています。これは京都などの古寺の庭をイメージして挿したものです。ここでは寒牡丹ですから花は短く、そこに牡丹の枯れ枝をあわせ、その枯れ枝の足もとに隈笹を、そしてその足もとに枯れ松葉をあしらうことによって、古寺の庭園の趣を出しています。これは二世光雲師の作品です。

牡丹の生産は、兵庫県宝塚の山本界隈、そして新潟県の新津、この二ヶ所が中心であったわけですが、宝塚は全く生産がなくなっています。現在の中心はその新潟県の五泉市周辺と島根県の大根島になります。大根島は、元は朝鮮人参の栽培で知られたところです。ここは芍薬の栽培をしていて、芍薬の台に牡丹を接いで栽培しています。ほぼ一年中牡丹がある所ですし、由志園という庭園を兼ねた牡丹園がございます。ここをご覧頂いたら、牡丹の種類など様々なことがわかるのではないかと思いますので、ご紹介させていただきました。

以上で、終了させていただきます。

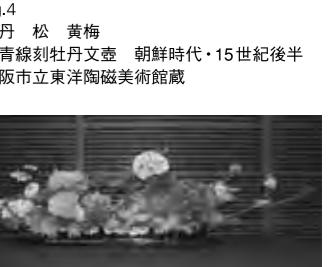


Fig.1*
『挿花さくらの香』版本 文政四年刊



Fig.2
牡丹一種



Fig.3
牡丹 梅花空木

*印は「花材別 いけばな芸術全集5 桃 木瓜 牡丹」主婦の友社 1974年より所載

*印は「小原流いけばな源流—雲心・光雲名作集—」小原豊雲著 小原流文化事業部 1975年より所載



1934年大阪出身。國學院大学文学部史学科卒業後、小原流三世家元小原豊雲へ直門として1956年に入門。アメリカ、ヨーロッパ、東南アジアを歴訪し、日本文化の普及につとめる。現在、大阪学院短期大学非常勤講師、財団法人いけばな芸術協会常任理事、大阪府花道家协会常任理事、財団法人小原流常務理事、財団法人小原流研究院院長を務める。